エコツアーカフェKOZU
開催のお知らせ

神津島を知ろう!!

テーマ

千両池について他

紺碧の海、白い砂浜が広がる神津島。
フィッシング、スキューバーダイビング、サーフィンなどのマリンレジャーのほか
天上山ハイキング、村内の歴史遺産の散策、温泉やキャンプなど、楽しみ方はいろ
都心からすぐのリゾートアイランド・・・それが「神津島」。

ゲスト　梅田勝海　さん

お気軽にご参加ください。事前申し込み不要、参加自由です。

「エコツアーカフェ」は、地域の未来に関心をもつ人が気軽に集まり、おしゃべりをする場です。

日時　7月18日(木)午後7:30～午後9:00

会場　開発センター

主催　神津島村商工会(Tel8-0232)

千両池（のまねえのえご）

島では小さな入り江のことを「えご」と言います。

神津島灯台のある辺り一帯は、切り立った海触崖が続いていますが、「あきどめ」と呼ばれている此処には、「大吹き」とか「二八」とか言う、水深も四十メートル以上の絶好の釣り場もあります。

この「あきどめ」にある「のまねえのえご」は、入口が十メートル位で海とつながり、奥行きは百メートル程、「えご」の幅は広い所でおおよそ三十メートル、陸地側も海側に面した方も切り立つ屏風岩で、波の荒い日でも静かな海面を保っているので、夏になると釣りや海水浴で賑わいます。

もともとこの「えご」は、島でも古い頃の噴火口跡に、海水が入って出来上がった、入り江であると言われている所です。

ある年と言っても、明治の中頃のことと聞きましたが、この「えご」の中に魚の群れが入り込み、毎日、毎日大漁が続きました。そのため網組は順番を決めて漁をするほどの大漁で、おそらく潮流の関係があったものと思いますが、その後この「えご」は、「千両池」と呼ばれるようになりました。

幕末の安政四年（西暦一八五七）に、島の名主に選ばれた清水庄右衛門は就任後間もなく、飢饉の年を迎えてしまいました。

毎日飢えている人たちを見て、何とかこの人達を救う手だてはないものかと、島役所の上にある物忌奈命神社（ものいみなみことじんじゃ）に毎日参拝して、その手段の神の啓示を」と祈りましたが、これという妙案も浮かばないまま、二十一日の満願の日を迎えてしまいました。

この日もいつものように拝殿に進んで長い祈りを捧げ、石畳の参道を中途まで下がってきますと、背後からいきなり

「庄右衛門、待て」と言う声がかかりました。

誰の声かと振り返ってみても人の気配も姿もなく、不思議に思い

「さては、今の声は神の声なのだろうか」と、拝殿の前にぬかずいて一心に祈り、神の次の声を待ちましたが、時が経っても何の応えも無く、恐る恐る拝殿の中を覗っても、木の葉のざわめきだけが聞こえるだけでした。

名主はこうして神の次の声を待ちましたが、ついに声が無いので島役所に帰りましたが、「庄右衛門、待て」と言う言葉は、名主が机の前に坐ってもありありと、耳の奥に残っているのでした。

「子供や老人、病む者には手厚くし、皆はお互いに扶け合うように」毎日村の中を歩いて励ましの言葉をかけ、それでも困る者には、自分の食料を詰めて分け与える日が続き、このままでは一番先に家族もろともわが家が、飢えてしまうと考えていました。

国のお役所には何回も救援をお願いしたのですが、当時の国の事情は島のことを構う余裕は無かったのかも知れません。

その当時の島役所は、毎日門を開くことはなく、「三ヶ日一」と言って毎月の一日、十五日二十八日の三日間、事務を執る仕組みでしたが名主はこの所、毎日島役所に詰めて村人の相談や訴えを聞いていました。

清晴い部屋で机の前に座り、今期の神社での出来事などを、あれこれと思案していた時、島の若者が島役所に飛び込んできました。

「名主、恩馳島に遭難したらしい船が見えます、どのようにしたら宜しいでしょうか」

「そうか、飢えてはいても遭難船の救助は島の男の義務、人を集めて船を仕立てておけ、私もすぐ支度をして行こう」と、選り抜きの若者を集めさせ、やがて名主をを乗せた船は恩馳島にこぎ着けました。

遭難した船は五百石積みの大船で、「かんこうまる」と言い、西の国から江戸に向かう途中、風に流されて航路を外し、風陰に錨を下ろしたが綱が切れてしまい、そのまま岩礁に乗りとげてしまったと言うことです。

船体も思ったほど痛んでもいない、少し積み荷を降ろして船を軽くすれば、この船は浮き上がると思うがどうか」と名主が言うと、船長は

「はて、積み荷は江戸のお殿様のお屋敷に運ぶ米なので、出来ることならこのまま降ろさないで、船を岩礁から引き下ろしたいのだが」と言います。

船の積み荷が米であると聞いた名主は、

「これだ、今朝聞いた神の声は、この米のことだったのか」と心の中で、神の加護の顕た

かなことに、畏れおののきました。

「今日はもう日も傾き時も遅い、作業も捗らないので仕事は明日のことにして、先ず皆さんも島の宿で一晩寛がれてはどうか、船のことはまず心配あるまい」と、船長や乗組みの人々を誘い、小船に乗せて島に漕ぎ戻りましたが、密かに心利いた若者を招き、

「この船は、今夜の満潮になれば必ず浮き上がる筈だ、夜の間にこの船を「のまねえのえご」へ引き込み、上から松の枝を被せ、船が見えないようにしておけ」と命じました。

その夜、名主の言ったように自然に浮き上がった、「かんこうまる」は、若者たちの手で「のまねえのえご」に引き込まれ、待っていた女たちの手で、船体は松の枝や椎の枝でスッポリと隠されてしまいました。

あわただしいその夜が明けて、「かんこうまる」の船長は船の姿が見えないのに驚いて、慌てて名主の家まで駆けつけました。

「名主どの、わが船の姿が見えないが、どうしたものだろうか」

「それは大変なことになりました、潮の流れの早い所なので、自然に浮き上がって漂流したのではなかろうか」と名主が答えますと、

「江戸にお届けするお米を積んだ船を、みすみす見失って自分だけ助かって帰る言い訳もできない、名主どの、船を捜したいがお力添えを頂けまいか」と船長が言うので、名主は

「さもあろう、早速若者を集めてお捜し致しましょう」と、若者たちに旨を含めて小舟を

仕立てて捜すことにしました。
やがて「かんこうまる」の船長や名主を乗せた小舟は、島の磯や入り江を隈なく捜しましたが、「のまねえのえご」では、その沖合いを舟足を速めて漕ぎ通るので、「かんこうまる」の船長は
「あの入り江は」と訊ねると
「あそこは御覧の通り、舟が入れるような所ではござらぬよ」と名主は答え、舟を急いで漕ぎ進めました。
船を発見できなかった「かんこうまる」の船長は、前の晩に物忌奈命神社で船を隠した、若者たちのために炊き出しをした時、神社の石畳にこぼした米粒を見つけました。
「島は飢饉だと聞いたが、神社の境内にこぼれていた米粒は、どうしたものなのか」と、名主に詰め寄ってきました。「かんこうまる」の船長は、きっと船ごと島の人達によって隠されてしまったものと、考えたに違いありません。
「ああ、あれは今朝、神主どのが転んで神様にお供えする、お洗米をこぼされたと聞いたが、なに他愛もないことです」と笑って答えました。
それでも「かんこうまる」の船長は、必ず島の何処かに船が隠されていると、島の人達に聞いて回りましたが、誰も彼も、
「存じません、知りません」と言うことなので、結局船長は諦めて乗り組みの人たちと、国地へ帰って行きました。

無事にこの人達を送り出した名主は、「のまねえのえご」から「かんこうまる」を引き出し、その積み荷の米を飢えている人達に分配したので、その年は飢えて死ぬ人は無かったと伝えられています。
元禄七年（西暦一・六九四年）に徳川幕府は、「島の浦百姓、釜百姓証文の事」と言うお達しを公布しましたが、それに依りますと、
「遭難船があれば必ず救助し、船体が破損していたらその修繕を手伝う事、また積み荷は公儀の物または、他の大名の物を問わず、すべて調書を取り、少しでも盗み取った場合には、ご法度通りのお仕置きをする」とあり、厳格なものであったので、庄右衛門名主は、これが発覚すれば死罪になると言う覚悟で、島の人を救ったと言います。
またその心を知っている島の人たちも、村中同罪だと言う気持ちであったので、こう言うことが出来たのでしょう。
今も恩馳島の右手の海には、この「かんこうまる」のものと言う錨が残されていて、それを引き上げて、昔の暮らしの記念にすべきだ、と言う人がいますが、今から百四十年前の錨は、海底でどう思っているのでしょう。

御殿山とこうせん様

物忌奈命神社の神域続きに御殿山と言う所があります。今焼酎「盛若」の醸造工場のある所と、裏山の傾斜の強い一帯が御殿山です。

ここはかって、代々島の神社の神主と、島の統治者、地役人（大正六年まで続いた制度で、名主の上にあり事実上の島の統治者）を明治二五年まで世襲していた、松江家の邸宅兼島役所跡で、此処への入口を「もんぐら」と読んでいたので、島で唯一門を構えていたものでしょうか。

古老からの話で、年の元旦になると島の家々の主が引きも切らずこの門を潜り、玄関に立って「ものもう」と奥に呼びかけるとやがて「どうれ」と応えて家人が現れ、年賀の挨拶を受けたと言います。また、「もう」と呼ぶと「とうれ」と家人が応えたとも言います。

この松江家の宗祖については、神津島村役場編の「村史年表」に拠れば、「永禄年間（西暦一五五八～一五六九年）松江家の祖、石田家ありて神に仕え、かつ島政を掌る」と記されています。永禄の頃の島の支配は後北条と言われる、小田原北条氏の支配を受けていたので、この北条氏と縁のある者か、または鎌倉時代の伊豆の国司工藤家と関係がある者であるのか、いずれにしても相模、伊豆との繋がりが在り、それも島の支配者として派遣された、古い家柄で在る事は間違いないと思います。

また徳川三代家光の時、松江家の祖石田因幡が、神職と地役人を命じられたと伝えていますが、此れは小田原北条からのの地役人の職を追認した形になるように思われ、地役人は島における行政の権限だけでなく司法の権力も併せ持っていたので名主は島役場に、地役人は自宅を島役所として執務していたとされています。

地役人は神主を兼務し、大きな権限を持ちながら島人本位の職務を行ったので、其の当主は島人から「旦那」と呼ばれ、畏敬されていました。

天明二年（西暦一七八二年）八月に地役人の松江久弥が、韮山代官宛に提出した「神津島書上帳」の中で、「久弥儀島役人筆頭にて、一体の島用名主同様相勤め支配役所より呼び出し之有節も申合出府仕候、並役料と相定候儀でも取候品御座無く、支配役所へ罷出候節は、人用或は筆墨紙等村割りに致し之を取立申候」とあり、地役人は無給で筆、墨、紙は村割り（言うなら税）の中から支出するとあり、地位の割りには経済的には恵まれていなかったようです。

なを、文化年台から文政（西暦一八〇四～一八二九年にかけて島ではかつをの豊漁が続き、地役人もかつをの現物の配当を受けるようになり、また松江家も船を持ちかつを漁に参加するようになりましたが不漁の時は逼迫した生活もあったとしています。

ある時地役人が公務で江戸へ行く事になりましたが、どうしても旅費の工面が着かず、止む無く取り止めすることになりました。それには次のような事情もありました。

地役人の出島には地役人の体面を保つ為に少なくとも二人の小者の供が必要で、二人の旅の費用と小者として同行させる、気の利いた若者を最低一ケ月の滞在でその期間の収入の保証が出来ないという事でした。

其の話を聞いた島の人達は「伊豆七島の旦那方が集るのに神津島の旦那が旅費の工面が出来ないと、恥ずかしい思いをさせるのは島中の恥」と村中から少しずつ費用を持ち寄り、二人の若者を添えて出発を見送ったと言いますが、この話は当時の地役人と島の人たちとの関係を良く表していると思います。

新島村の前田家は、十二社神社の宮司と地役人を世襲した家で、当時新島村の教育長をされた前田健二氏からこのような話を聞きました。

幕府の天領であった伊豆の国や伊豆七島は、伊豆韮山の江川代官が支配していましたが、伊豆七島の支配役所は江戸深川の割り下水に在って、新島の地役人と共にそれぞれ供を従えて、江戸役所へ向って歩いていましたが、両刀を手挟んだ武士はともかく、供の小者は始めて見る江戸の繁華な客明気に見蕩れる姿、また真っ黒に日焼けしている主従を田舎者と見て、地元のならず者たちが揶揄嘲弄を始めたと言います。

暫くそれを聞いていた神津島の松江地役人は、やおら拍手拝礼を行い刀の下げ緒を解き、刀に手を掛けて身構え、「島を出る時如何なることがあろうと、刀は抜かぬと神に誓って参ったが、余りの雑言聞き捨てならぬ、今明神に止むを得ぬことで刀を抜くことの許しを得たので、前田氏私はこやつらを切り払う、お主検分を頼む」と、言うとならず者たちは一算に逃げ出したと言う事ですが神津島の松江地役人の刀は、赤錆で抜くことも出来ないものだったと言う事でした。

明治二年（西暦一八六九年）に、伊豆諸島は伊豆の国の支配から、廃藩置県後の韮山県の所管になり、翌年の三月には、世襲制最後の地役人となる松江半之助が五歳の折、父親で当時の地役人であった松江因幡が死亡、また其の年の十一月には祖父の松江伊豫が相ついで死亡しました。

明治四年（西暦一八七一年）には、韮山県から足柄県に移管になりましたが、世襲制とは言え戸長（今までの地役人を戸長に名称を変更した）には松江の当主が幼いためか、任命されていなかったようです。

再び、足柄県の一部が静岡県に組み入れられた時、伊豆諸島も静岡県の所管になり、また明治十一年（西暦一八七八年）には東京府に移管され、島は目まぐるしい時期を迎えました。

明治一四年（西暦一八八一年）四月、半之助十六歳の時地役人に任命され、また明治一九年には郵便集配諸負人を命ぜられ、御殿の地役所で郵便業務を扱いました。

明治三二年（西暦一八九九年）の十二月の末、島の家を多く焼き尽くした火災で、この御殿（島役所、郵便局）も類焼し、歴史を語る什器、資料も消失してしまいました。

この火災の後、松江家では海岸近くの大六畳（大六太）に二階建ての隠を新築しましたが、この

邸も先の戦災で失っています。

この御殿の跡地の湧き水を利用して、神津島酒造会社が清酒の醸造を始めましたが、今は焼酎二盛岩」に替わっています。

御殿の森は子供達のチャンバラの遊び場で、南向きの斜面は終日暖かく、冬の一日を大声を上げて遊んでいました。

この森の中腹に「こうせん様」と言う祠があります。土手上の石室には御神体が納められて居て、其の一段下にブロック作りのお調屋があります。ある人はこの「こうせん様」の御神体は摩利支天で、自在の通力を持つ護国の神であると言い武人の神であるとの事でした。

若しかしてこの「こうせん様」は松江家の守り神か、または屋敷神かとも考えて居ます。

島の二叉路には「こうせん様」と島の人たちが呼んでいる猿田彦神、道祖神の石碑が一十数基立てられています、この神は道行人を守り悪災を祓う神ですが、この(こうせん様)とどうつながるのでしょうか。

ただ以前は、(庚申講)があったのではと考えています。

神道では猿田彦を、仏教では青面金剛を祀り、朝まで眠らない講ですが、眠ると体内の三戸が天帝に告げ口をして死没させると言う中国の道教の考え方が残っています・秩父山には、(一日三夜得大勢至菩薩)の石碑と、この(青面金剛)の石碑が並んでいます。

海の安全を守り大漁を授けて呉れる金比羅様

村立のはまゆう保育園とオタ・ジュリアの神が建つ小じんまりした森を「コンピの森」と言います。

昔、この辺は灌木の繁る自然の森で、男の子供たちには一日中この森で、チャンバラや、カクレ、また陣取りをして遊び、小学校の校外自治班の第二班の集合する遊び場で、時にはかなり乱暴な石合戦などした、懐かしい思い出のある所です。

今村役場の建つ辺りは天草一揆になっていて、「こんぴら山見」と呼ばれた所には、春もまだ浅い頃から始まる「春飛び魚漁」の時、終夜火を焚いていた高さ5mも、一メートルほどの丸い竪明場の炉と、其の後ろには火の番と網を保管するバンゴ（番小屋）が建っていました。

今、保育園と生き甲斐センターの建つ辺りは、寺山続きの八三郎沢（ハッチャブロザア）の深い沢で大きな蛇を見て「大蛇だあ」と騒いだ思い出がある所です、此処は小学校の校庭拡張の時の土砂を運び埋め立てをした所です。

そしてこの森に鎮座しているのが金比羅様です、境内に建つお宮屋は間口三・五間、奥行きは二間ほどで、ガラス戸を開けると畳敷の部屋で、中央に蛍光灯の電灯が吊り下げられています。部屋の右手奥にはやはり囲炉裏（ユルイ）が切ってあり、東側は小さな土間の駄込みで片隅に掃除用具が立てかけてあり、板戸があるので此処が入口なのでしょうか。

部屋の右手片隅の正面には高目にしつらえた祭壇があり、燭台や榊子などの祭具が並べられています、またこの祭壇のガラス窓越しに外の御神体を納める祠が見られます。

祭壇上の欄間には赤い顔と長い鼻の天狗と、黒い嘴（くちばし）を噛かしている烏天狗（からすてんぐ）の二つの面が、ガラスを嵌めた木箱の中で飾られています。

講の方が寄進された物でしょうか、薄暗い欄間で鈍く光るこの面を、怖々覗いた昔の思い出が甦ってきます。

お宮屋の裏の石の階段の上に、コンクリート作りの祠があり、扉はアルミ、サッシュの近代的な祠になっています。

金比羅は元ガンジス川に棲んでいた鰐（わに、クンピーラ）で人を食い、舟を沈めるなど暴悪な事をしていましたが、象頭山で仏の説法を聞いて悔悟し、薬師十二神将に加わって仏法護持の善神となったとされ、日本では雑船の際に救護される功徳があると信じられ、航海安全の神とされています、神津島ではそれに大漁の神と重ねて信仰されているようです。

この森も以前は自然一杯で特に「くみ」の木は枝を綺一杯広げていて、子供たちは其の下に筵（むしろ）を敷き邪魔な枝を払い、バンゴを作って遊びましたが、大人に見付かるとバンゴは散惨に破壊されていました、此れは森の自然を守るためでした。

今も境内の西側（海側）に立っている、自然木の鳥居の位置から先には、道路は有りませんでした、其のことは特にその理由を考えることはありませんでしたが、この金比羅様が航海の安全と大漁を授けてくれる、船乗りや漁師の神様と言われ古来から漁業一筋に生きて来た神津島の人達には篤い信仰が根強く残されている事や、大漁ののぼりを立てて港に向かう漁船は、この金比羅様の沖合いに来ると、必ず漁獲した魚数匹を海中に投げ入れ、

「受け取ってくんなされ、大漁を授け給いなされ」と呼びながら、船中の一同は鉢巻を外し、深々と頭を下げ祈りの姿を見ることが出来ました。

また新造船の船降ろしの時は金比羅様神を一回二回と船を回転させ、航海と大漁を祈りました、其のことを考えると、金比羅様への道は、海の神に相応しくこの海から、道のない鳥居まで通じていると考えています。然し今は鳥居から役場前に出る坂道が出来ています。

この金比羅様の講の方たちは、毎年世話人を選び、清掃とお祭りの奉仕をされていたそうですが、今は其の講の人たちも年老いて、中々手が届かないと話していました。

庄右衛門の水神様

神津小学校への通学路を昇ると、右に曲がる多幸湾へ通じる道路があります。この道路は戦時中軍用道路として作られ、当時は戦車道路と呼ばれていました。この道路の角には南島建設会社の事務所と倉庫がありますが、今から四十年ほど前に島の（解脱の会）が「萬寿之水」と墨書した木柱を立てていましたが、取り除いたのか今は見えません。

南島建設の建物の先の土手に上と下に二つの小さな祠が祀られています。この祠はこの道路下の清水庄右衛門家で祀る「水神様」で、この道路の出来る前は庄右衛門家続きのつばき山でした。庄右衛門家の話しですと、此処には小さな湧き水が流れていて、生活用水として大事に使っていました。此処に小さな祠を据え自家の漁船に「水神丸」と名付けるほど、水に乏しい暮らしの中が偲ばれる話しです。

ところがある時、この湧き水がパッタリと出なくなり、祠の下の方から僅かに滴るほどになり、庄右衛門家では水の量が増えるようにと、祠を下に移しました。

ある日、他家に嫁いだ妹が来て、

「夢の中に水神様が現れて元の場所に戻りたい、かっての場所へ移して欲しいと、しきりに言われて目が覚めた」と告げ、当主の兄に元の場所に戻すようにと促しました。

また家人も是非移すようにと口々に言うので、庄右衛門は家人に手伝わせて、水神の祠を元の場所に移し、下には改めて新しい石造りの祠を据えました。

すると前と同じように綺麗な水が、上の祠の辺りから湧き出すようになり、また庄右衛門家では水に不自由しない、暮らしが出来るようになりました

そのため、ここには上と下二ケ所に、水神様が祀られるようになったと言われています。

明治四〇年（西暦一九〇七年）の七月に、長雨の後に今老人福祉館（よたね会館）の上辺りから鉄砲水が噴出し、下流の家全、半壊戸数四七戸、流された家の下敷きになり死亡した人十六人を出す大きな災害が起こりました。

同じ奥神山の麓に住む庄右衛門家は、家人にも家に被害が無かったので、この水神様のお加護とそれからもことさら大切にするようになりました。

然し其の湧き水は、水害後しばらくして水は出なくなりましたが、それからもこの水神様は大切にされています

なを、この庄右衛門家は幕末の島で飢饉に苦える頃、千両出で米船を借り仕切った、庄右衛門名主の家です。